

## 産地、今(14)

## リレ一随筆

## 山口県の岸根ぐり産地

(山口県農林部経営普及課技術・  
情報推進室 しげた すすむ 重田 進)

The Introduction of Chestnut Producing District in Yamaguchi. By Susumu SHIGETA

(キーワード：山口県、産地だより、クリ)



## I 山口県におけるクリ栽培

山口県のクリの栽培面積は、1980年ごろには約1,900 ha あったが、担い手不足、輸入クリの増加等により、2001年には965 ha と減少した。しかし本県の果樹の中ではカンキツ類に次ぐ位置付けとなり、全国でも5位の栽培面積となっている。

主要な産地は美和町、岩国市を中心とした県東部と、美祢市を中心とした県の中央部にあり、この2産地で県内の栽培面積の約3分の2を占める。

県東部は「岸根」を中心とした産地で、5市町村で約320 ha の栽培面積がある。生産組織は、「岸根」を一時貯蔵して出荷しているJA山口東と、「岩国栗」として販売している錦川森林組合の二つに分かれている。

美祢市を中心とした産地は、JA山口美祢「厚保栗」生産部会として組織されており、栽培面積約150 ha で品種構成は早生から晩生までバランスの取れた品種構成となっている。

ここでは、「岸根」原産地で山口県で最も古いクリ産地である美和町を中心に紹介したい。

## II 「岸根栗」産地

## 1 「岸根」の由来

岸根の由来は古く、源平の時代までさかのぼる。当時、小瀬川の対岸の栗谷村(現広島県大竹市)に大きな実をつけるクリの木があった。源平の合戦で敗れ、山代(現在の玖珂郡北部)に逃れてきた平家の落人の中に接ぎ木の技術を持つ者がおり、このクリの穂木を取り寄せて、自生のクリに接ぎ木したのが始まりとされる。美和町坂上地区には、樹齢300年以上と推

察される岸根の古木が十数 ha 残っており、中には樹齢400年を越える巨木もあった。

この大果系のクリの中から選抜されたのが「岸根」で、品種名は、大正2年に京都で開催された全国栗名称調査会に出品した際、原産地の地名をとって名付けられた。

古木群は、弥栄ダムの建設に伴い、1970年代後半にほとんどが伐採されたが、水没をまぬがれた約10本が原木園として残され、美和町くり生産部会が町の委託を受けて管理している。

## 2 産地の概要

美和町は、「岸根」の原産地でクリ栽培の歴史も古く、天保のころ(1600年代後半)には、炭やワサビ

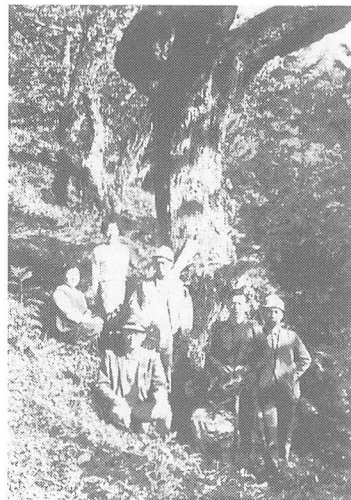


写真-1 「岸根」の巨木(1964年農業試験場調査で最も大きいとされた)

とともに販売されていた記録が残っている。このクリは大果で、しかも貯蔵（赤土に埋めて貯蔵されていた）され年末ごろから出回ったため大変珍重されたようである。

現在、栽培面積は約120 ha、125名が美和町くり生産組合に加入している。品種は約70%が「岸根」で残りは「筑波」、「銀寄」の2品種が交配樹として植栽され、中晩生に偏った品種構成になっている。

出荷販売方法は、収穫した「岸根」をくん蒸処理のため、いったん選果場や共同処理施設に集めて処理し、処理後各生産者が持ち帰り、オガクズ貯蔵し11月上旬から12月にかけて出荷する。また、湿ったオガクズ詰めでお荷するため、果皮の光沢が失われず、大玉、高品質のクリとして市場から高い評価を得て高値で取り引きされている。

オガクズ貯蔵は、直射日光の当たらない涼しい場所に幅1 m、高さ30 cmの枠を作り、この中に水分を50%程度含むオガクズ（新しいものは避ける）とクリを交互に積み重ね、上をコモ等で覆っておき、貯蔵後は掘り出して出荷する方法である。

一昨年、冷蔵庫が導入されたことから、貯蔵方法もオガクズ貯蔵から冷蔵貯蔵へ移行してきており、出荷方法も冷蔵庫を活用できる方法を検討する必要がある。

### 3 栽培指導の状況

山口県のクリの本格的な栽培指導は、美和町で明治末から始まった。大正時代には二硫化炭素くん蒸やオガクズ貯蔵技術が開発され普及している。

戦後の新生運動や事業導入により大規模な植栽が行われ、1980年ごろは200 haを超え、産地としての地位を固めていった。我が国初のクリ選果機も導入された。

その後、担い手の高齢化等の影響で管理作業や防除に十分な手が入らず、栽培面積の減少、園地の荒廃、病虫害被害果の増加や品質低下等の問題が起り、優良園地を守り、産地を維持するのが難しくなっている。このため、関係機関が中心となり、カットバックによる低樹高化、改植、園内作業道設置など指導してきた。近年は、生産者の技術力向上を図るため、クリ剪定士制度を創設したり、農作業受託組合による防除作業受託、パソコンによる園地情報管理（マッピングシステム）を活用した園地流動化促進など、産地活性化に向けた取り組みを積極的に行っている。

### 4 病虫害対策

#### (1) 問題となった病虫害

病虫害防除に関する記録を見ると、水浸法によるクリシギゾウムシ防除が古くから行われていたようであ

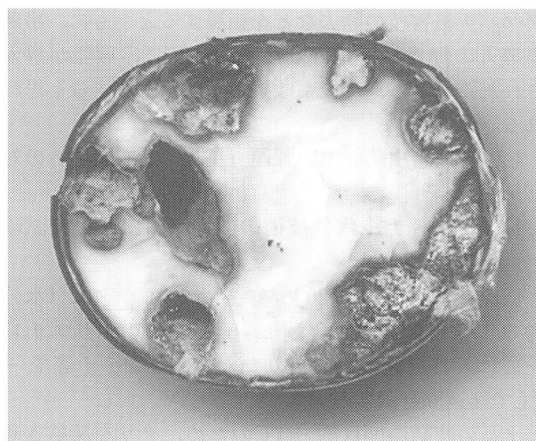


写真-2 クリシギゾウムシの被害果

る。その後、二硫化炭素によるくん蒸、臭化メチルくん蒸と防除方法が変わってきた。臭化メチルの全廃に対する対応が急がれる。

1949年にクリタマバチが山口県に侵入し、各地で被害をみたが、「岸根」は抵抗性であったため大きな被害には到らなかった。現在、チュウゴクオナゴバチの定着も確認されており、大きな問題にはなっていない。

クスサンは周期的な大発生を繰り返し、大きな被害が発生している。多発生した1965年、1981～82年には、町や生産組合がマユの買い上げの事業を行っている。クスサンには登録薬剤がなく、早期の登録拡大が望まれる。

カツラマルカイガラムシは1978年に本郷村で発生が確認され、1983年には美和町にまで分布を広げた。発生地域では、クリ樹の枯死や樹勢の衰弱等被害が発生した、冬期マシン油散布や生育期の殺虫剤散布、被害樹の伐採などの防除対策の徹底を図った。また、農業試験場では天敵類の調査を行い天敵防除の可能性について検討した。発生は数年で小康状態となり、その後被害は認められなくなっている。

その他、1963～64年ごろ、ウスリーカキカイガラムシ、キクイムシ類が発生し被害を出した記録がある。

病害では、貯蔵中の果実腐敗の発生が問題となっている。オガクズ貯蔵は、常温貯蔵のため腐敗果が発生し、多い年には10～30%以上となり経営に大きな影響を与える。1994年の調査では、腐敗果の80%から炭疽病菌が分離されたことから、腐敗の主因は樹上で炭疽病に感染した果実が、貯蔵中に腐敗を進行させたことによると考えられた。対策として、貯蔵場所の環境改善や立木での炭疽病防除、整枝剪定の徹底やクリ

タマバチ被害枝の除去などを指導するとともに、冷蔵庫導入の働きかけを行った。2000年に冷蔵庫が導入されたことから、今後腐敗果の問題は解決すると思われる。

(2) 病害虫防除上の課題 (臭化メチル全廃への対応)

1) 臭化メチル代替技術の開発 (山口県農業試験場)

低温殺虫法：クリ 20 kg を 2 kg のオガクズ (水分約 60% 含む) と混ぜ合わせ、0.05 mm のポリエチレン袋に入れて袋の口を折りたたみ、コンテナ等で  $-2^{\circ}\text{C}$  で 2 週間貯蔵する。

クリの凍結温度は約  $-4^{\circ}\text{C}$  のため、クリを凍結させないよう温度管理に注意する。

二酸化炭素殺虫法：ブリキの 18 l 缶の中にクリ 10 kg とオガクズ 2 kg を入れたポリエチレン袋を入れる。この上に新聞紙で包んだドライアイス 500 g 置き、袋の口を粘着テープでシールして冷蔵庫 ( $3\sim 5^{\circ}\text{C}$ ) へ入れ、2 週間処理する。常温で処理するとクリに発酵臭が生じるため、必ず冷蔵庫で処理をする。

代替薬剤の検討：ヨウ化メチルの登録に向けた試験を植物防疫協会の委託試験として実施している。

2) 実用化に向けた課題

低温殺虫法、二酸化炭素殺虫法は、処理中にクリ糖度が上昇し品質向上効果が認められ、腐敗果の発生もないことから「岸根」の貯蔵出荷を考えると有利になる。反面、処理期間が 2 週間かかり出荷が遅れること

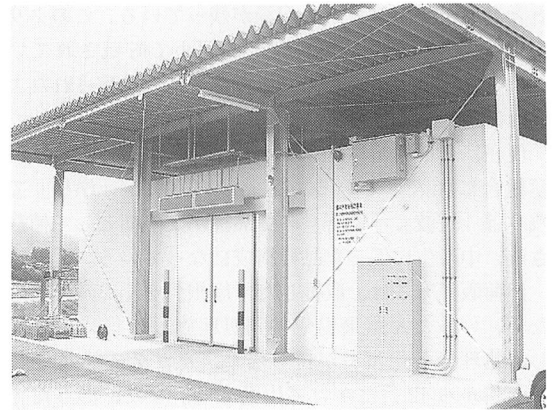


写真-3 導入された保冷库 (美和町)

から、早生品種等では販売上不利になる恐れがある。また、収穫後すぐ処理しないと幼虫の生育が進み、被害がでることから、収穫のピークに合わせた施設整備が必要で、多大な費用がかかる等、実用化には課題が多く残されている。

二酸化炭素はクリに登録がないため、登録拡大の必要がある。代替薬剤の早期登録が強く望まれ、ヨウ化メチルの登録検討を急ぐ必要がある。

臭化メチル不可欠用途の申請を行う予定ではあるが、認定される保証はない。美和町の「岸根」はこれまで貯蔵クリとして高い評価を得てきた。これを活かし、殺虫・貯蔵・出荷の体制を再編し、産地活性化を図るチャンスとして活かしていきたい。

### 主な次号予告

次号 5 月号に予定されている掲載記事は次のとおりです。

マイナー作物・病害虫の防除のための農薬登録 (仮題)	田中 稔
シソの新害虫モトジロアザミウマ (仮称)	伊藤啓司
薬剤抵抗性ケナガカブリダニによる茶のカンザワハダニ制御の可能性	望月雅俊
酸性電解水によるイネ種子伝染性細菌病防除の可能性	園田亮一

*Rhizoctonia solani* における菌糸融合による分類の

現状	国永史朗
リレー随筆：産地、今	
(13) 鳥取県のらっきょうの産地 (仮題)	佐古 勇
新殺虫剤トルフェンピラド剤の使い方	野仲信行
植物防疫基礎講座	
土壌病害の見分け方	
(5) 根こぶ病菌による病害	対馬誠也
線虫の見分け方	
(8) 昆虫病原線虫類	吉田睦浩

定期講読者以外のお申込みは至急前金にて本会へ  
定価 1 部 920 円 送料 76 円